

旧呉海軍工廠海軍技手養成所跡と周辺の海軍遺構

海軍工廠技手養成所と海軍工廠工場労働者養成所は、呉の海軍技術と建造物の遺産を確立する上で重要な役割を果たした。両校で養成された技術者・技能者は、第二次世界大戦（1939～1945）後も国のために活躍し、呉の近代造船業の確立に貢献した。串山東麓の坂道にある2つの大きな石碑は、この2つの学校の跡地を示している。

海軍工廠工場労働者訓練学校は、若い工場労働者を教育する場であり、同時に近くの工廠で働くことで実践的な経験を積むことができた。これらの学生の中で最も熟練した学生は、その後、技術者養成学校で教育を続けることが許された。全国で唯一大和を建造できる呉海軍工廠で大和の大きさ、規模、技術的意義のある戦艦を建造することができたのは、これらの高度な技術者の専門知識があったからこそである。

第二次世界大戦の後半、連合軍が日本の軍事施設を爆撃するようになり、海軍工廠での作業はますます危険なものとなった。そこで、学生や作業員を守るために、工廠を見下ろす串山に神社が建てられた。かつては工廠神社と呼ばれていたが、戦後は海軍との関係を避けるために産業神社と呼ばれるようになった。急な石段を登っていくと神社にたどり着くが、現在は石の台と石塔の跡だけになっている。また、山の中には第二次世界大戦末期に建てられた防空監視所やコンクリート製のトーチカ、地下壕に通じる換気立坑などの廃墟が点在している。

呉市は、戦後の連合国軍の占領が終わると、海軍工廠跡地を近代的な造船所として整備し、世界最大級のオイルタンカーを生産してきた。呉市は、戦前から技術者養成所の優秀な技術者を輩出していたことから、戦後の恐慌から急速に経済が回復し、その技術力は現在に至るまで受け継がれている。現在、呉の造船所では軍艦は生産されていないが、修理のために港に持ち込まれることもある。